

みられ、ホシダ、ネザサ、コチデミザサ、ジュズスゲ、ドクダミ、ヒトリシズカ、フユイチゴ、ヌスピトハギ、セントウソウ、ミツバなどと混生している。また橿原町中平では四万十川の支流の川岸崖上に生育しており、トサシモツケやキシツツジなどの生えるところで稀にみられる。

○イデリンドウについて (大場秀章) Hideaki OHBA: A taxonomic note on *Gentiana nipponica* Maxim. var. *robusta* Hara

イデリンドウ *Gentiana nipponica* Maxim. var. *robusta* Hara は原先生によって本誌 21 巻 (1947) に発表されるまで、リシリンドウ [牧野富太郎, 植物学雑誌 17: 212 (1903)] やミヤマリンドウ [武田久吉, 植物及び動物 3: 2207 (1935)] として扱われてきた。原先生は武田博士の見解を支持されながらも花が大きく長さ 2-2.7 cm にもなること、花冠副片が広三角形で縁辺がいちじるしく剪裂することおよびかく裂片が大きく時に幅広くなるといった相違によりミヤマリンドウの変種とされた。その後、大井博士 (1965) は日本植物誌改訂版でこれをリシリンドウの変種とした。

1973 年夏飯豊山の数十ヶ所でミヤマリンドウとイデリンドウを観察することができた。その結果、両者の生育地に明瞭なちがいが認められた。即ち、ミヤマリンドウはヌマガヤ・イワイチョウ群落が占める雪田植生にあらわれるのにたいして、イデリンドウは高山低木群落と見做されるガンコウラン・ミネズオウ群落が発達する風衝地に限って生育していた。けれども両者が混生する場所や外部形態上中間にあたるものは全く見出しえなかった。このことは結城嘉美氏が山形県植物誌 (1972) で「ミヤマリンドウが高山草原でも湿性のところに生ずるのに対し、イデリンドウはむしろ砂礫地に近いところに生え両者ははっきり住みわけている」と述べているのにほぼ一致する。

リシリンドウ、イデリンドウ、ミヤマリンドウの既知の相違点に加えて、かく筒上縁に内膜があり、リシリンドウでは全周にわたり高さ約 1.2 mm、イデリンドウでは全周にわたるが裂片間では高さ約 1 mm、裂片の中脈附近では約 0.5 mm、ミヤマリンドウでは裂片間だけの内膜片となり高さ約 1.2 mm となること、さらにかく裂片の側脈がリシリンドウでは主脈から鈍角にでてあらい網目を作るのにたいして、他のものは鋭角にでてまばらに結合するといった相違もみられた。既知の相違点を含めイデリンドウは他の 2 者から明らかに区別できるように思われる。しかしまたリシリンドウとミヤマリンドウはイデリンドウを介して相互に密接なつながりをもっていると考えられることもできる。 (東京大学総合研究資料館植物部門)